

出雲ブランド化推進市民委員会【自然・環境グループ】

第2回 現地取材メモ 活動記録

フォトヴォイスプロジェクト鵜鷺編

日 時： 平成23年(2011)7月29日(金)

8:00~12:00

場 所： 鵜鷺地区(大社地域)

参加者： 市民委員6名、案内2名、事務局1名 計9名

記 録： 吾郷 誠(自然環境グループ・サブリーダー)

フォトヴォイスプロジェクト第2弾は、一年でもっとも暑い大暑の候に、海の町・鵜鷺(大社)を訪問しました。

「鵜峠(うど)」と「鷺浦(さぎうら)」からなる「鵜鷺(うさぎ)」地区は、島根半島の西端、山と海に囲まれた小さな港町です。入江の奥にぎっしりと古い家が並び、かつては物資の輸送に北前船が往来し、山からは銅や石膏を積み出して販わいました。鵜鷺げんきな会の指導・案内のもと、前半は「塩づくり体験」、後半は「鷺浦の町並み散策」を実施しました。

塩づくりは、近年鵜鷺げんきな会の皆さんが販売されている「鵜鷺の海の恵」の製造工程の一部を体験しました。海水を汲み上げ、火で炊いて塩をつくる...、単純なようですが、手間のかかる大変な作業であることを聞くことができました。沖合い1000mから海水を汲み上げて、2つの釜で2段階にわけて水分を飛ばし製造します。作業終盤にできるニガリの処理や白い塩をつくるための異物の除去など、様々な工夫がなされ美味しい塩ができていることを学びました。

今回は七輪と鍋を使い、塩分が濃くなった海水を約10分から15分程度かき混ぜ、塩を取り出す作業を体験をしました。海水がみるみる塩になっていく様子は、はじめて見る光景でした。塩という食品が自然そのものであることを実感することができました。

塩作りを終えて向うは、鷺浦のまち。島根半島の浦々は、北前船に代表される海上交通の発達とともに、重要な役割を果たしてきました。そのひとつである鷺浦は、当時の面影が残る全国的に数少ない港です。

まちの中には、文珠院の「汗かき仁王」や天然痘の守護神を祀る出雲大社の摂社・伊奈西波岐(いなせはぎ)神社、漆喰彫刻の鰻絵や浦を守るように鎮座する柏島、港にそそぐ八千代川などの様々なスポットがあり、参加者は、おのこの写真におさめていました。

鵜鷺地区も第1回目の唐川と同様に、自然と人間が深く関わった歴史が実感できる土地でした。暑い最中のプロジェクトでしたが、写真や言葉を集めることができました。



■ 塩づくりの説明を聞く。

フォトヴォイス (サンプル)

集めた言葉 黄泉の国から / 怖いものは恐くあってほしい。 / 自然の結晶をつくる。 / 自然は、白い。 / 自然のかけら、白いかけら。 / 小さな港の小さな夏 / 雲の印象 / 憧れをかたちにする。 / 赤瓦が美しい町並み / 島に守られている。 / 太陽の味がする。 / 風を待つ。 / 神と火と塩と / コロロコロロとかき混ぜて / 鵜鷺の時間、自然な時間 / 蔵の重たい扉の向こう側 ...etc.

